

# 歌人税所敦子の形成

長 福 香 葉

はじめに

税所敦子<sup>①</sup>は、御歌所歌壇の中心であった桂園派勢力を担った歌人の一人である。明治五年（一八七二）に歌道御用掛を務めた八田知紀に師事したとされ、無署名「税所敦子刀自逝く」（『女鑑』一九九号、一九〇〇年二月）に記された敦子の略歴には、

若うして、香川景樹の門人八田知紀大人に師事して、頗る和歌に造詣す。<sup>②</sup>

という一文を見ることが出来る。また、知紀の高弟で後の御歌所長高崎正風と親交を結び、正風に推されて宮中出仕に至るといふ経緯を有する。さらに、無署名「税所敦子刀自の小伝」（『日本弘道叢記』九五号、一九〇〇年三月）では、

年や、長けてよりは、千種有功卿に就きて和歌を学び、和漢の書にも志して一々其の蘊奥を究む。後八田知紀翁にも教をうけ

たることあり。

とあるように、知紀以前には堂上公家の千種有功の教えを受けている。有功は堂上歌人でありながら、香川景樹をはじめとする地下歌人等と交わったことで知られ、また景樹の門人であった知紀とも交遊関係にあったとされる。<sup>③</sup>

では実際に敦子は、有功や知紀、正風とどのように関わっていたのだろうか。ところが、それについて具体的に言及し、関係を明らかにした研究がなされていないことに気付く。敦子が桂園派に位置付けられるに至る経緯、つまり敦子が歌人として形成されていく過程は、決して看過できない重要な検討対象であるはずなのに、蔑ろにされたままなのである。よって本稿では、注（一）所掲拙稿に引き続き、敦子の基礎的研究の一環として、敦子の歌人人生に大きく関わったと考えられる有功、知紀、正風との関係に着目し、歌人税所敦子が形成されるに至った過程を明らかにする。なお、敦子が明

治八年（一八七五）に宮中出仕を果たす以前に焦点を当てることとする。

敦子の経歴については、敦子の逝去後に新聞や雑誌等に度々掲載されたが、どれも抽象的な記述にとどまり、年代が明らかでないものも多いため、詳細さに欠ける。また、敦子の基礎的研究とされる屋代熊太郎編・発行『税所敦子刀自』<sup>4</sup>の伝記は詳しいが、その記述の具体的根拠が不明であるため、信憑性に欠ける点がある。

敦子自撰の家集『御垣の下草』（一八八八年 東京・松井総兵衛発行）の序文を記した正風が、その中で敦子の経歴を次のように紹介している。

権掌侍税所敦子の刀自はもと林氏にて、文政八年といふとし、京都鴨河のひんがし錦織の里に生まれ、幼き時より歌をよみ、文をかき、よにめではやされき。十八の年に父を失ひ、二十にして薩摩の殿人税所氏にとつぎ、二十八にて良人におくれ、あくるとし鹿兒島にくだり、姑につかへて孝養をつくされしに、贈大納言殿その才徳を聞たまひて、ぬきいでて若君のかしづきとなされしかば、よるひる心を尽し守り立られしに、其かひなく、俄にみまかり給ひければ、「同じ道にも」と思ひなげかれしを、心にもえまかせず、又家にかへりて姑につかふることはじめの如し。其後前左大臣殿のひめ君の近衛殿に御入輿の時、つけられて都にのぼり、久しき年月をひと日の如くつかへられ

しに、明治八年の秋、皇后宮の内侍にめされたり。

さらに正風は、

唯君はこころしりの友におはすれば、「巻のはじめにひとことそへたまひてよ」といはるるに、としごろのまじらひをおもへば、いなむべくもあらず。

と、敦子に請われて序文を記したことを明かしていることから、この記述に誤りはないと考える。この序文をはじめ、加えて敦子の著作や、池袋清風「税所敦子刀自を憶ふ（二）」（『国民新聞』一九〇〇年三月十五日）、阪正臣「税所刀自の伝」（『心の花』三卷二号、一九〇〇年二月）といった、敦子と近い人物によって記された記事、『敦子刀自』の伝記中の「敦子の臨終」に収録される「明治三十三年二月八日／諷誦文」<sup>5</sup>を基礎として、敦子と有功、知紀、正風との関わりを具体的に見ていくこととする。あくまで敦子を軸に据え、時系列に沿って見ていくが、有功と知紀、また知紀と正風の関係にもわずかながら言及していきたい。

## 一 京都時代

### （一）文政八年～同十三年

文政八年（一八二五）三月、敦子は、京都鴨川の東に位置する錦織の里（現、京都市左京区岡崎）に生をうける。

この年、二十七歳だった知紀は、鹿兒島県立図書館蔵『八田知紀一代略記 全』<sup>6)</sup>に、

同八月五日藏方目付御断申出、御免被仰下候。尤京都藏役勤望に付、内願申上置候故二候。且歌学執心之癖にて頻りに上京之願心おこり、右通二及候事。

とあるように、「藏方目付」を辞任し、京都藩邸での「藏役勤」を切望している。「歌学執心之癖」とあるように、知紀は歌道に対して強い関心を持ち、その道を学び究めるために希望した京都行きを実現させたのである。それを契機に、知紀は本格的に歌の道へ足を踏み入れた。以下、知紀が文政十三年（一八三〇）に桂園入門するまでを追ってみたい。『一代略記』の文政八年（一八二五）十二月の条には、

富小路貞直卿え参殿仕候。夫より月次御会席にも折々罷出候ていつも御前え被召義御懇命候。へ中略へ○城戸千楯所え折々差越万葉集会説相頼候。其外折々相交候雅友、加茂季鷹、村田春門、大江広海、大橋長広、服部敏夏、垣本雪臣等にて候。尤香川先生ハ拔群の人にて終に致入門候事。

とあり、地下歌人とも交流のあつた堂上歌人富小路貞直の元へ参上しており、以降歌会にも出席していたようである。また、知紀は景樹門へ入ることを決心する一方で、本居宣長に師事した城戸千楯に度々万葉集の会説を願ひ出していた。同時に「雅友」として、有栖川

職仁親王や村田春海・加藤千蔭らと親交のあつた賀茂季鷹、本居宣長門の村田春門、春海門の大江広海などといった歌人らとも交わっていたようである。景樹を敬慕しながらも、桂園派歌学に一心に傾倒するのではなく、学派の区別なく、様々な歌人らと接触を持っていた知紀の交遊が知られる。また、おそらく万葉集の会得もまた歌道のためには必要不可欠であることを弁えていたのであろう。

翌文政九年（一八二六）夏、知紀は京の岡崎にある景樹の自邸東塙亭を訪れ、初対面を果たした。加藤雄吉「八田知紀並其著書」『めざまし草』巻四七、一九〇〇年十一月）に、

貴賤通交帳（自筆）に  
一香川景樹先生

右文政九年戊夏始て岡崎東塙亭を訪ひ致相見候

とあるに拠る。ただし、「貴賤通交帳（自筆）」に関しては、同じく加藤が『薩州群書一覽』<sup>8)</sup>において、

貴賤通交帳

八田知紀が備忘のために記しつる帳簿也。こなたよりの訪問、入門者の名簿などもあり。八田三郎氏蔵の遺書の中に見えき。

と記しているのみで、その所在については明らかになっていないが、自筆との加藤の判断が正しければ、知紀の伝記事項として信頼できよう。

『一代略記』の文政十三年（一八三〇）八月の条を見てみる。

同八月香川家に入門の事、尤山田一郎左衛門殿上京便より書翰を以て相頼候。先年拙者在京之時分迄は景樹翁折々致相見候迄にて入門の儀不相果候処、此節弥感服之訳にて初て入門に及候事。

知紀はこのとき薩摩にいたため、入門の旨を記した景樹宛の書翰を、上京する同じ薩摩藩士で桂園門下の山田清安に託した。知紀は文政九年に初めて景樹と対面した後も時々は会う機会に恵まれていたようだが、結局入門を果たせず、四年を経ての入門となった。そこで、稲葉文庫蔵「桂園入門名簿」（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム）を確認してみると、一丁目に「入門名簿／自文政十一年戊子正月／天保七年丙申」と記され、文政十三年十一月の項には、「十六日 薩州藩 八田喜左衛門 知紀」と記録されている。知紀が清安に入門届を預けたのは八月であるが、それを景樹が受け取り、正式に入門を認めたのが十一月十六日ということであろう。こうして知紀は、三十二歳のときに景樹の門人となったのである。敦子が京都に誕生した年、歌道を学ぶため知紀もまた京都に立った。桂園入門の意志は固く、その思いを果たすも、一方で、流派にこだわらずに幅広い交遊関係を築いた知紀の歌道に対する考え方が反映されていると言えよう。

## （二）天保六年

清風は「税所敦子刀自を憶ふ（二）」において、伝え聞いた敦子の幼少期の話を、次のように回想している。

子幼時始て和歌を詠ぜし時、八田翁の門人なる一老翁曰く「敦子は生れて五歳より詠歌を学びし」と。未其<sub>（未）</sub>其<sub>（其）</sub>実否を知らず。  
〈中略〉且此時始て敦子の名を聞けり。

予嘗て京都川東大和路建仁寺の近所なる上田重女の居を訪ひ、歌談偶敦子の事に及ぶ。重女曰く「歌会とあれば如何なる男子先生方列席の座にも少しも畏れ憚らずして、出席する十二三歳の田舎娘らしき少女ありし由、是即ち今の敦子なりし」と。蓋敦子は至て謙遜なるも和歌を好の熱心斯に至りし也。

幼少の頃から歌を詠み、歌会にも積極的に参加していた敦子の姿が窺い知れ、歌道に対する執心を物語る一文であると言える。また「諷誦文」では、願いが成就するという嵯峨の虚空蔵の評判を耳にした敦子が、十一歳のときに「歌道の名人」になりたいという願いを叶えるべく、一夜こもって祈願をしたという逸話が紹介され、次のように続ける。

茲に歌道の名家千種有功卿伝聞して、大に之を感じ、召して侍女となす。是より卿に就て歌道を学び、巔然頭角を顕せり。然れども猶其道に達せざるを歎くこと深し。時に八田知紀あり。

刀自の師友たり。翁慰めて曰く、「貴女の如きは実に斯道の達人なり」と。

このわずか十一歳の歌道精進を伝え聞いた有功は、敦子を「侍女」として受け入れ、その傍らで歌の道を教示したのである。

加藤の『尾花集』所収「八田知紀略年譜」<sup>9)</sup>には、「天保六年 卅七歳、夏始て千種有功卿に参殿す」とあることから、知紀と有功は、天保六年（一八三五）に初対面を果たしている。おそらく景樹を通じてのことであつたのだろう。この年は敦子十一歳の時であり、先述の経緯を経て、直ちに有功に教えを請うていたとすれば、まさに敦子と知紀はほとんど時を同じくして有功との交流を始めたことになる。十一歳以前にすでに知紀の知遇を得ていた可能性については否定はできないが、幼少時の敦子を取り巻く環境については不明な点が多く、また知紀に関する資料からもそれを証明し得ない。おそらく有功を中心とした歌人グループの中に知紀が加わり、その中に有功の庇護を受けていた敦子がいいたのではないかと推察する。

### (三) 弘化元年

弘化元年（一八四四）、敦子は二十歳のときに薩摩藩士税所篤之と結婚する。清風「税所敦子刀自を憶ふ（一）」は、

予老父は、天保年代青年の時、漢学の為に京都に留学せし事あり。曰く「当時京都錦小路薩摩邸内の重なる役人は、京都留守

居山田一郎左衛門清安、同書役八田喜左衛門知紀、見聞役税所隆右衛門篤之等也。以上の三名皆桂門に入り、和歌を学べり。内税所氏は、更に四条画の泰斗景文に画を学び、画名を文豹と云へり。云々」思ふに、此間に敦子は多分和歌の関係よりして、税所氏に知られ、其室となられしならん。

と、父親から聞いた話を掲載している。清風の聞書によると、敦子の夫篤之は、山田清安、知紀とともに京都錦小路の薩摩藩邸に勤めており、その一方で、桂園門に入り、歌を学んでいた。また篤之は、四条派の画家松村景文に絵を学ぶ、画人としての顔も持っていた。

そしてこの頃、正式に有功門に入門する。大阪市立大学の森文庫には、有功の門人録『有功卿御門人方校名并居處之扣』<sup>10)</sup>があり、現在森文庫和古書画像データベースにて画像が公開されているため、容易に閲覧が可能である。表紙には、「弘化元年／有功卿／御門人方校名并居處之扣／千種□□」<sup>（漢字）</sup>と記されており、弘化元年から有功没年である嘉永七年までの入門記録である。同書については、森繁夫が『人物百談』（一九四三年 三宅書店）に「六六 千種有功門人帳」と題して、次のように詳述している。

一般の歌人系図などでは、有功の門流と特示するものを見ず、其門下として、僅に高島式部と税所敦子の名を見る位に止まるが、こゝに偶然にも、筆者の眼前に「御門人方校名并居處之扣、弘化元年、千種家」と題せる名簿が現れた。此帖は豎四寸

二分、横一尺一寸、半紙二つ折の横綴本で、人員総て百五十六名、憾むらくば上部左右損傷甚しく、肝腎の入門年月の項が多く欠け、隔靴搔痒に堪へぬが、前後を案ずるに、最初の三十七筆は同一筆一気に書下しあり、其以後は筆蹟区々にて、家扶用人などの随時書記せしと覺しく、謝礼居住等克明に登録されてある。

画像を確認すると、確かに上部の破損によつて、入門年月日や口入、居住地等が欠け、判読し得ない箇所がある。敦子の入門年月日に関しても破損のため不明ではあるが、

林故左馬允女

小伝敦子

京仁王門通東ノ川端野はづれ

と、名前は見える。前後の配列から、敦子の入門年についておおよその見当をつけてみる。敦子入門以前で、年月日が判明するのは、筆頭に記録されている「巳年六月廿五日ノ尾張大納言殿」、次いで「午年十一月ノ仙石讚岐守殿」のみである。「尾張大納言殿」は尾張徳川家十二代当主徳川齊莊、「仙石讚岐守殿」とは但馬出石藩の仙石家七代仙石久利のことである。敦子の入門以後は、「巳ノ四月廿七日」「午正月九日」「午八月八日」「未正月十六日」「嘉永二年ノ二月廿四日」「嘉永三年ノ正月六日」「嘉永四辛年ノ亥正月十五日」「嘉永五千子年閏二月十四日」「嘉永六丑年ノ二月二日」「寅年ノ二月廿

三日」と続く。つまり、大名であった二名を冒頭に掲げるが、それ以降は年代順に記されているようなので、敦子の入門年は同書が書き始められた弘化元年以降、弘化二年（一八四五）四月以前であつただろう。前述の通り、敦子は入門前より有功の教えを受けていたが、この頃おそらく結婚したのを機に、正式に入門を果たしたと考えられるのではないか。

#### （四）嘉永三年ノ同五年

嘉永二年（一八四九）、鹿兒島では島津家の家督相続問題が起こる。斉興の後継をめぐつて、斉興の側室であるお由羅の子久光と斉彬が対立し、斉彬擁立に奔走した人々が処分された。所謂嘉永朋党事件（お由良騒動、高崎崩れとも）である。知紀が景樹門へ入門する際に仲介役となつた清安、そして正風の父高崎温恭は切腹、知紀は免職並びに謹慎、正風は遠島の刑を受けている。正風の著述や談話をまとめた遠山稲子編『歌ものがたり』（一九二二年 東京社）の「始めて詠歌に志させし動機」には、嘉永三年（一八五〇）七月に十五歳に達するのを待つて島流しに処せられた経緯が記されている。

一方、同じく連座した知紀は、『二代略記』の嘉永四年（一八五二）の条によると、

同四年亥五月中宿御暇頼達蒲生郷へ差越管候処、同所之儀は差支候儀有之候。故都之城え場所替申上候。同十月廿二日より同

所へ差越候事。

とあり、嘉永四年十月二十二日から都城へ移り住んでいる。その都城時代に編まれたのが『都洲集』である。『都洲集』については、『八田喜左衛門著／嘉永六丑年冬／江戸芝神明前／岡田屋嘉七』の刊記を持つ内閣文庫蔵本を使用する。中本で上・下巻から成り、上巻には都城の歌人大館晴勝の跋文を取める。歌集が編まれた経緯は、次の晴勝の跋文に明らかである。

去年の今はかりより、桃岡八田大人しばらくわが都洲へすみ給ふべきよしありて、やがてこ、なる景雲亭へとまり給へりしに、必隣あるためしなれば、朝夕にまゐりつどひてなにくれと物きこゆるほどに、よみすて給ひし歌どもあまたつもりて、社友の耳にのみしるしたるも少からねば、そをひとつつにものしてわなみが腰折をさへつみくはへ、かりにこ、の名におふ高千穂の都洲集と名づけしも、たゞ一時のすさみ草なりけり。

嘉永五年十月

大館晴勝

この跋文が書かれたのが「嘉永五年十月」であることから、「去年の今はかり」とは嘉永四年十月頃であり、転居の時期が『二代略記』の記述と一致する。都城の人々は、知紀を慕って集まり、歌について学んだ。晴勝は、知紀や彼の門人らの歌を集めて『都洲集』を成したのである。この後には、さらに追記がある。

かくものしをへつるに、としごろをちこちより大人のもとへお

くられたざぐやうのもの、或は消息文のおくやはしやにかいつけおこされしなどあまた見出たる。それむなしくちりうせむもくちをしきわざなれば、いでや亭中にもれたる近頃のもあつめてひとつにこそとて、れいのみだりにかいつめたる。やがて下巻とはなしぬめり。

当初は、一冊（上巻）のみで終える予定であつたらしいが、知紀の元へ送られてくる短冊や手紙に書き添えられた歌などを集めて、さらに下巻を編んだという。敦子の歌は、下巻に春歌一首、夏歌二首、冬歌一首の計四首が収められている。

下巻の末尾には、一丁分の歌人姓名録が付されている。「都之城」の歌人は四十二名、その他「鹿兒島」や「京」などを含む二十六名が名を連ねている。二十六名は次の通りである。

鹿兒島	池田貞賢	樺山浅子
山口利兼	樺山資雄	若松則文
松元時直	松元時直	松元時直
境田通古	田代清秋	田中国定
橋口春臣	川畑清流	渋谷国安
関 広国	山田恭平	近藤清明
京 奥田千枝子	京 小田垣蓮月	京 田中みや子
京 別所氏妙子	京 小笹氏升子	服部光武
豊後 渡辺 明	日向高岡 市来政美	天日隅宮孫宿祢
琉球 浦添王子朝憲		

敦子らと並んで著名女流歌人蓮月尼の名前が見えるのは興味深い。「鹿兒島」の部に敦子の名前があるのは、嘉永五年（一八五二

四月二十九日に夫篤之を亡くし、翌六年（一八五三）四月に京都を發つて夫の故郷鹿兒島に下るといふ、敦子の前半生にとつて最も大きな境遇の変化を、『都洲集』の姓名録が反映させたためであろう。

## 二 鹿兒島へ下る

### （一）嘉永六年〜安政三年

夫を亡くした敦子は、翌六年（一八五三）に娘の徳子を伴つて婚家がある鹿兒島へ下り、亡夫の家族に献身的に仕える。京都から鹿兒島までの道中を著したのが『心つくし』であり、文中には有功との離別の様子が記されている。引用は、敦子の自筆と推定される鹿兒島県歴史資料センター黎明館所蔵の卷子本から行ふ。

千ぐさの殿にも、此五とせ六とせは打絶てまうで奉らざりしかど、かくいまはと下るほどの御いとまをだに聞えざらんもかしこかるべければ、二日三日かねてあからさまにまうのほりぬ。まだいはけなかりしほどより、道のをやと頼み奉り、ち、なども「おのがなくなり侍りなむ後はともかくも御かけにかくるへさせ給へ」とのみなげき置奉りしかば、此年比となりては、おさ〜参りつかうまつることもなかりしかど、なほ忝なうかへりみ、思召たるを、かくてわかれ奉らんこと、思ふに、涙もとまらず。

当時二十九歳の敦子が、五、六年前から有功との交流が途絶えていたと言っていることから、おそらく二十歳頃に正式に入門したものの、四、五年後にはすでに往来が途切れてしまったらしい。そのような状態であつたにもかかわらず、鹿兒島へ下る前に有功の元を訪れ、別れを惜しんだ。

同年五月、知紀は赦免されて都城から鹿兒島へ帰る。『二代略記』に、「同六年丑五月十五日御奉公障御赦免被仰付候事。」と記されていることに拠る。同年に正風もまた流罪が免ぜられている。

敦子は、鹿兒島へ下つたこの年か翌年に正風と出会う。そのことについて、正風は、税所徳子編輯発行『さだめなき世』（一九〇〇年）所収「税所敦子君の棺前に誄す」において、

正風が歌によりて君と始めて相見しは、君が齡三十に垂んとし、正風が齡十八九の頃なりき。

と回想しており、正風十八、九歳、敦子が三十歳頃に初めて対面したという。ところが、『歌ものがたり』の「税所敦子刀自勅撰を冀ひしこと」では、その年齢が若干異なり、敦子は三十歳を過ぎた頃で、正風が二十〜二十二歳くらいであつたとし、正風の記憶に幅がある。

〈前略〉一生交際をむすんで益を得たと思ふ人は税所敦子であつた。この人は一体自分よりは先輩であつて、余程有名な人であつた。此人が良人に永別れて薩摩に下られた時分には、未だ



やうやく三十を少し出した位の年齢であつた。其頃自分は二十歳か二十一・二才位の年であつたが、何しろあつ子と云ふ人は有名な婦人であつたから、時々行つて歌の談話を聞いたり何かして交つて居つたところが、中々歌の道に秀で、居る計りで無く、才徳兼備の人で、実に得難い人物であつたから、私は常に敬服して居つた。殆ど若い時分には、心中には自分の師とまで思つて尊敬して居つた。

知紀撰の歌集『小門の汐干』は、二人の出会いを裏付ける贈答歌を収める。『小門の汐干』は中本上・下巻二冊本で、下巻に知紀の跋文を収め、主に鹿兒島の門人や親交のあつた人々の歌を収録している。ただし、成立及び出版年については不明である。『国書総目録』では「安政六刊」とし、福島タマ執筆「八田知紀」（昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第一巻』一九五六年昭和女子大学光葉会）の著作年表では「安政三年」とするが、それらの刊記を持つ伝本は見当たらない。また、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによると、宮城県立図書館本の書誌注記に「〔版〕安政六年刊の重印」とあるが、宮城県立図書館に問い合わせたところ、実際にはその記述は見られないという。ただし、年代が特定できる歌の中で最も新しいのは、『小門の汐干』下巻の雑歌に収録されている、「富士谷御杖が三十三回忌に追年懐旧」と題する正風の歌である。御杖の三十三回忌は安政二年（一八五五）

であるはずなので、その後すぐの成立であつたとするべきか。

また『小門の汐干』の編纂意図については、知紀の跋文から明らかとなる。引用は、鹿兒島県立図書館蔵本に拠る。

〔前略〕今のおほみやどころさだめ玉ひしよりのち、歌のさまもおのづからやすくたひらけき大御代ぶりとうつりかはりて、猶せみの小川のみをたえず、日かげのかづら長く伝はり、そのしらべやその御時にいたりて神山のみねの松風いやさやかにきこえつ、よものくにぶりとはいへども、色このみの家のみにとまらず、都人のえらびにさへもれざらむ中に、ひとりわがさつま人の歌、さる冊子どもの中に見えざらんは、もとよりしかあるべき理りになむ。〔中略〕しかはあれども、鶯蛙の声きかざらん里しなれば、とし比例のわざするかた手におのがじ、うめき出たるもすくなからず。そが中にはすこしきこえたらんなきにしもあらねば、おもふとちとみにあひはかりてこの一卷をばものしつ。

都人の手になる撰集に採られることのなかつた薩摩の人の歌だが、中には少し意味の通じる歌もないわけではないので、仲間同志ですぐに相談し合つてこの一卷を完成させたという。敦子の歌は、上巻に春歌八首、夏歌一〇首、秋歌一三首の計三二首、下巻に冬歌五首、恋歌六首、雑歌一五首の計二六首が収録されている。

『小門の汐干』上巻の巻頭には三丁半にわたる「姓名」が付され

ており、計一三五名(内「琉球国」四名)が名前を連ね、上・下巻で全九二四首を収録する。これだけの歌人と歌が集まるということは、薩摩藩領においてそれだけ知紀が歌人として名を成し、信頼されていたことの証であろう。「姓名」には「税所氏敦子」とあり、敦子の亡夫も「税所敦之」と名前が見える。篤之の歌も収められていることから、ここ最近の歌に限っていないことが分かる。また、「鶴園親義」こと正風、さらに黒田清綱の名前があることも指摘しておきたい。知紀に続いて宮中へ上がり、やがて御歌所の中樞を担っていく敦子・正風・清綱の歌が収録されているということは、この時点ですでに薩摩閥の人脈が築き上げられていたといえ、注目に値する。

では、その下巻の雑歌の部に収録されている敦子と正風の贈答歌を見てみる。

税所文豹の年忌に

則文

〈中略〉

同人の三回忌よみて遣しける

親義

此夏は君がむかしを忍び音になくとのみ聞ほと、ぎすかな

返し

あつ子

杜鵑よに忍ばる、声きけばいよ／＼をしき音こそなかるれ

篤之の三回忌に際し、正風から歌が送られている。篤之の没年が嘉永五年であるから、三回忌は安政元年(一八五四)である。遅く

ともそれまでには二人は知り合っていたということになる。つまり、ほぼ同時期に鹿児島に立った二人は、程なくして対面を果たしていたと言えよう。おそらく敦子二十九・三十歳、正風十八・九歳頃のことであつたと推測される。以後、敦子が七十六歳で没するまでの付き合ひであるから、正風が敦子のことを熟知していたというのは当然のことであろう。

敦子に歌を学ぶ一方で、帰郷後の正風は、知紀の門人であつた若松則文にも歌の教えを受けていた。そのことについては、「歌ものがたり」の「八田知紀翁の門に入る」に見える。

其時分に八田先生と云ふ人は、私の国では紀貫之のやうに貫ばれて居る人で、即ち香川景樹翁の門人であつた。そこで、山田清安先生の没後は、皆此門に集つた。若松氏も其内の一人であつて、時々歌の会などを宅ですることもあつて、八田先生も折々まゐられた。

年月は判然覚えて居ないが、ある時私が十八か九の時であつたが、今の八田先生が若松則文のところ、会の催しがあつて出席されると云ふことであつた。〈中略〉すると、此時若松則文の云ふには、「今日は有名なる八田先生が御出席になつて下さるのは誠に幸で、恰も好機であるから、お前達もお目通りをしておいたら宜からう」と云はれたので、「私もどうかお目に懸りたい」と思つて居つたところであつたから、誠に嬉しくて、

「それは有り難いことである」と云つて、悦んで折田と共に出席した。

正風は、嘉永六年から安政元年（一八五四）の十八・九歳の時に、歌会を通じて知紀と顔を合わせ、その日のうちに知紀の門人となっている。同じく『歌ものがたり』の「鶴園の記」には、

そこでその後も何やかやと歌の書拔などをさせて呉れたり、又小門汐干と云ふ歌集を撰ばる、際には、其下撰のことなどすべてを委任せられた。又先生の家集忍草の二篇を出さるゝに付いても、私に其下撰りをさせられて、而うして序文まで書けと云はるゝことであつたから、私はホンの最下の門人であるから、思ひも寄らぬことで、再三辞退したけれども、許されず、「是非書け」と云ふことであつたから無拗書いたが、其序の終りに、鶴園親義と書いてある。

とあり、知紀は正風に『小門の汐干』入集歌の選出や編集作業を任せ、自らはそれらの確認作業を担っていたものと思われる。また正風は、安政三年（一八五六）出版の知紀の家集『しのお草』二編に、「鶴園親義」の名で安政二年の序文を寄せている。つまり知紀は、入門して程ない、また名もない正風に歌集の編集をさせ、まして序文を書かせる機会を与えたということである。嘉永朋党事件のこともあろうが、もちろんそれだけでなく、正風の歌才を信頼してのことであつたに違いない。

## （二）安政四年～同六年

安政四年（一八五七）九月九日、薩摩藩主島津斉彬に若君哲丸が誕生し、敦子はその傅役を仰せつかることとなる。このことに關して、阪正臣が「税所刀自の伝」で詳しく述べているので、掲げておく。

かゝる程に、太守島津斉彬公最末の公子鉄磨君誕生あり。公、敦子が賢を聞き、之を稠人中より拔擢し、公子の保母とせられけり。これ異数の事にして、藩人みな公の英断に驚きぬ。公、敦子が行為すること数日、大に喜びて曰く、「予、人を得たり」と。蓋ゆくく之をして公子を教育せしめんとの意ありしならん。敦子も亦この不次の拔擢を蒙り、公の値遇に感激すること極めて深かりしことは、明治の御代となりて知られたりき。

しかし、安政五年（一八五八）七月十六日に斉彬が逝去すると、翌年一月十日に哲丸も夭折してしまつた。

## 三 再び京都へ

### （一）文久三年

文久三年（一八六三）、斉彬の養女<sup>12</sup>として貞姫を近衛忠房の元へ嫁がせることとなり、敦子はその後見役の老女として選ばれ、上京する。敦子三十九歳のときであり、その旅の模様は道中日記『松の

さかえ』<sup>13)</sup>に詳しい。阪正臣「税所刀自の伝」には、次のように記されている。

島津家と近衛家とは浅からぬ御間柄なりけるに、猶も親密を累ねんとて、故従一位忠愍公の御嫡男にして今の篤磨公の御生夫たりし忠房公、その頃は左大将と聞えしに配はせ参らせむ、島津家支族の家の女を久光公の養女とし、これを都に上せらるゝこと、なり、うしろみの老女として又敦子をそへられけり。

この貞姫入興の際には、知紀もまた貞姫に付き従い上京していた。その道中を著したのが『めぐみの風』<sup>14)</sup>である。以後、敦子は明治八年（一八七五）の宮中出仕に至るまで、十二年間近衛家の老女として忠勤に励んだ。その間の敦子と島津久光に追従して先に京都へ上っていた正風の様子を、『歌ものがたり』の「税所敦子刀自勅撰を冀ひしこと」に見ることが出来る。

爾う云ふ訳で又々折節に出会ては、道の話なんぞをして、互ひに歌を見せ合つて居つた。けれども、何分先方は、近衛光蘭院の老女であり、殊には又極めて慎しみ深い人であつたから、私の宅なんぞに参られたことは一篇も無かつた。只、近衛家の奥で話をする位のことであつた。

## (二) 明治二年

明治二年（一八六九）跋刊、中本で上・下巻二冊本の知紀著『白

雲日記』には、敦子の序文を収める。ただし、明治二年の刊記はなく、羽鳥春隆による跋文の末尾「明治二巳のとしの春」に拠る。慶応四年（一八六八）六月五日、知紀は藩主島津忠義に従い京都から江戸へ向かう。その旅の目的は、敦子の序から知られる。引用は、長野県立短期大学図書館蔵本（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム）に拠る。

八田大人ひさしくみやこの任にそなはりたまひ、みちのほまれはた世にならびきこゆるひとなきものから、まだあづまぢのふじのたかねを見たまはぬなむ、いとほいなくおぼゆるなど、ひとぐ御前ちかくてかたりあへりしをきこしめして、「そはくちをしきわざにもあるかな。としもやう／＼おいぬとはいへど、なほいとすくよかなれば、とくゆきてみよかし。みちのほどもめづらかなるこそおほからむをまちみん、はたたのしかるべう」とのたまはせて、やがて御いとまたまはりしかば、かしこみきこえて、とみにいでたちたまひしより、いつしかとひをかぞへまちきこゆるほどに、あきのなかばちかうなりてかへりのぼりつゝ、くさぐさのつとにそへてたてまつりたまへるひとまき、かたはしうかゝひみるにも、めもあやにいのちのぶるこ、ちするは、かのやまにありてふいくすりもとめ得たまへるしるしの、まづはあらはれたりともいひつべくや。 あつ子

知紀は、未だ富士山を見ていないことを残念に思っていたが、主

君の薦めもあって、富士山を見る目的の旅へ出発した。また、この日記のほんの一部をのぞき見るにおいても、目がくらむほど大変立派で命が延びるような気持ちがあるのは、富士山にあると言われている、不老不死の薬を手に入れた効果が早速現れたと言った方がいいだろうかと結んでいる。

日記の中には、出発前の知紀を激励する敦子と知紀の贈答歌各三首が収められる。

#### 税所あつ子

たかき名を空にき、つ、不二のねの神もや君を待わたるらん

みな月のてる日にちかき不二のねも雪やふるらん見む人のため

たび衣たつときより敷しまのやまと錦のつとをこそまて

かへし

大空のむなしき名こそたか、らめ神のおもはんことぞやさしき

みな月の空にもつもる白雪を君と、もにも見んよしもがな

さくや姫めぐみたまはゞ敷しまのやまと錦を山づとにせむ

敦子は、当然この旅とその目的を知っていたわけである。また、七十七歳という老齢に達していた知紀が、二十六歳も年下の敦子に作品の序を任せるといふことは、旧知の仲であったということもあろうが、それだけ敦子の歌文の才能を認め、評価していた証左と言える。

#### おわりに

以上、歌人税所敦子が形成されるに至った過程を明らかにするため、特に敦子が有功、知紀、正風とそれぞれどのように出会い、関わってきたのかについて考察してきた。敦子は幼い時から堂上歌人の有功に歌を学び、おそらくその有功を介して知紀とは出会ったのであろう。知紀は、敦子と時を同じくして有功と交流を始めていることから、敦子とはその頃からの長年にわたる付き合いとなる。知紀撰の歌集には多数の歌が入集し、また知紀の作品の序文を記すなど、「諷誦文」の文言を借りるなら、まさに「師友」の関係にあつたと言えよう。知紀と正風が流罪を赦免された時には、敦子も鹿兒島の地に立っていた。正風はその後間もなく、敦子と歌友として交わるようになり、同じ頃には知紀門への入門を果たす。こうして敦子、知紀、正風の三者がともに鹿兒島時代を過ごしたことが、結果として人脈を強固なものとし、やがて上京、宮中出仕へと至ることに繋がつていくのであろう。知紀の後を追うように、正風、敦子と宮中へ上がったのは必然であつたに違いない。

今回の考察にあたっては、その実態を詳細に伝える資料が少なく、概観を捉えるにとどまってしまったのは否めない。しかしながら、流派の別なく、様々な歌人と積極的に往来した有功や知紀に師事し、そして知紀に連なる正風との親交によって歌人税所敦子は形

成されるに至ったとは言えるだろう。

注

- (1) 敦子に関する主な参考文献、先行研究については、拙稿「御歌所派歌人 税所敦子 ―官歴の考証―」（『国文学攷』第二二〇号、二〇一二年六月）の（注）で列挙しているので、こちらを参照されたい。
- (2) 以下、資料及び雑誌等の引用に際しては、通行の字体に改め、振り仮名は省略し、適宜句読点・濁点・カギ括弧を補った。引用文中に私に施す括弧は（ ）で示し、引用文に本来ある（ ）と区別した。また、傍線や改行の／は私に付した。
- (3) 清水勝「千種有功と八田知紀―有功と知紀の著述（主として版本の特性）より―」（『志學館大学文学部研究紀要』二二巻一号、二〇〇〇年七月）では、景樹没後の有功と知紀の関係を明らかにしている。
- (4) 一九一六年刊。二年後の一九一八年には、『税所敦子伝』と改題して博文館より再刊されている。以下「敦子刀自」と略す。
- (5) 「諷誦文」の末尾には「僧園清衆敬て白す」と記されている。『敦子刀自』の「敦子の臨終」では、「敦子の葬式は、二月八日午後一時、砂土原町の自邸を出棺、青山墓地に仏式を以て行はれた。其の導師は、目白僧園の雲照和尚が自ら勤められ、（後略）」とあることから、目白僧園の「清衆」が、葬式当日に読んだものと思われる。
- (6) 成立年未詳。内題「八田翁一代略記」。内題下に「自筆の写」、その右側に「子八田善助」と記されている。また、その下に「大正十二年五月中旬／編輯所本にて」とある。以下「一代略記」と略す。
- (7) 加藤雄吉については、渋谷宗光「尾花集」と嶋外（『嶋外』第八号、一九七一年三月）、同「八田知紀と薩摩の和歌」（『大妻国文』四号、一九七三年三月）で触れられており、松波資之や松浦辰男、森嶋外、田山花袋、柳田国男等と親交があったとされる。また、加藤は「税所敦子刀自を憶ふ」（『女鑑』二〇三号、一九〇〇年四月）に、  
二十九年の夏、黒田子爵の紹介を得て、初めて刀自の邸を訪ひしかども、偶々病臥中にて、会話を得ず。  
と述べていることから、黒田清綱と面識があったようで、さらに清綱を介して敦子と顔を合わせたようである。「尾花集」（一九一七年 加藤雄吉発行）収録「薩摩国学者の伝記を調査し始めた動機」では、井上通泰に勧められて薩摩藩の国学者の伝記を調査し始めたことを述べている。
- (8) 鹿児島県立図書館蔵『薩州群書一覽』は、鹿児島県立図書館から出版されており、成立・出版年は不明である（A）。同図書館には、出版年が一九五七年で、Aと全く同じ内容を持つものがある（B）。また、出版者は不明だが、一九一六年の出版年を持つ和綴じのものがある（C）。図書館側の調査によると、県立図書館がCを活字にして印刷したものがBであり、それを本と成したのが一九五七年であるという。Aもその頃の成立か。
- (9) 「八田知紀略年譜」が何に拠って作成されたかは不明であるが、『一代略記』と照らし合わせてみると、重なる部分が多い。加藤は、『薩州群書一覽』で「一代略記」について、  
一代略記 一冊  
八田知紀著。その幼時より明治のはじめに至る迄の閲歴を自筆もて略叙せり。明治三十一年夏、八田三郎氏のもとにて一見せり。  
と記しており、実見したことを明らかにしている。また先述の通り、「貴賤通交帳（自筆）」の存在を明らかにし、自筆と判断している。よって、おそらくそれら知紀自筆文書を元に「八田知紀略年譜」を作成したのではないかと思われる。
- (10) 大阪市立大学森文庫和古書画像データベース  
[http://disv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user\\_contents/mori/2208.djvu](http://disv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/mori/2208.djvu)

(11) 「鶴園親義」という名前について、清水勝「桂園派歌人八田知紀と高崎正風―知紀の歌集『しのふくさ』と、その第二編巻下跋文の筆者―鶴園親義」について―(『鹿児島女子大学研究紀要』一八巻二号、一九九七年三月)では、知紀から与えられ、文久二年(一八六二)の土籍回復時まで使用された変名、又は仮名であることを明らかにしている。また、遠山稲子編『歌ものがたり』所収「八田知紀翁の門に入る」(『鶴園の記』)においても、その由来が知られる。

(12) 正臣は、貞姫を「島津家支族の家の女を久光公の養女とし、これを都に上せらるゝこととなり、」(『税所刀自の伝』)としているが、寺尾美保「税所敦子小考―島津家との関わり―」(『尚古集成館紀要』第五号、一九九一年三月)では、『島津正統系図』(一九八五年 島津家刊行会)と尚古集成館所蔵の日記を掲げ、貞姫が久光の養女から、さらに斉彬の養女となって近衛家へ嫁ぐ経緯を明らかにしている。

(13) 『松のさかえ』には、『敦子文集 税所敦子稿本』所収「松の栄」(写本)と、『松の栄』と題する独立した写本の二つの伝本がある(ともに中山右尚氏所蔵)。内容の詳細については、別稿にて改めて検討する予定である。『女鑑』六号(明治二十五年一月五日)の新年附録、また『敦子刀自』には翻刻が掲載されている。

(14) 『めぐみの風』については、東京大学史料編纂所に稿本があり、有馬祐政編『勤王文庫』第四編(一九一九年 大日本明道会)には翻刻が収められている。

〔付記〕 本稿を執筆するにあたり、資料の閲覧をご許可下さった鹿児島県歴史資料センター黎明館に心より御礼申し上げます。

― ちようふく・かな、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 ―